随想 第164回

木工沈床と聖牛
―土岐川の大改修に想う―

土岐市長　塚本保夫

平成元年の九・二〇災害をはじめ、土岐川の氾濫の歴史は私たちの記憶に新しいところであります。

土岐川改修の期成同盟会を組織し、市民参加の運動を展開してまいりましたが、幸い、上流部では洪水調整機能の大きい小里川ダムが完成し、流域では上下流一体となった河川の大改修事業が実施されました。

市内の永久橋の周辺では狭窄部の大規模拡幅に伴い、永久橋とその下流の神明橋の二橋が、七十m余りから百三十m余りの長大橋に立派に生まれ変わり、水の流れが飛躍的に改良され、洪水の心配が軽減されました。

これも関係の地権者の皆さんなどのご協力のおかげでありまして、心から深く感謝いたしております。

しかし、異常気象が続く昨今、細心の注意は必要であります。

公共事業のあり方が何かと議論されておりますが、現在から遠い将来にわたって、市民生活の安定安全と安心を確保するのに必要な社会資本の整備充実は極めて大事なことであり、抜本的な河川改修事業を見事完成されました国土交通省の皆さんに心から感謝申し上げます。

この河川改修事業に併せて、浅野の緑地公園とともにセラトピア南と図書館北の河川敷が河川公園として立派に整備され、見事な都市空間として生まれ変わりました。

また、人生において幼き日の原体験は貴重なものでありますし、地球環境を考える上でも河川の生態系の保全と復元は大切であります。

最近はコンクリート中心の河川整備が当たり前となっております中で、今回、土岐市として特に国土交通省にお願いして、多自然型の在来の水制工法であります木工沈床と聖牛を採用していただきました。

先ほども申し上げましたように、魚などがすみやすい川にするために必要なことであるからであります。

幸い、セラトピア南から土岐津橋の上流にかけて木工沈床が施工され、図書館前より少し下流の水衝部（水が突き当たる場所）には、武田信玄公以来の四百数十年の歴史がある聖牛を施工していただき、いずれも小学生の皆さんに参加、お手伝いをしていただきましたが、良い経験になったと存じます。

木工沈床は、丸太を井桁状に組み合わせて岩石を詰め込んで護岸や床止めとするものであり、聖牛は、丸太を三角錐状に組み合わせた中に岩石を詰め込んで、水流の勢いを抑えるものであります。

いずれもすき間がたくさんあって、小魚や鰻の隠れ家となり魚巣となって、魚のすみやすい生態系豊かな川づくりにつながります。

私たちの一生の中で、幼き日に自然の中で魚釣りなどの原体験をすることはとても重要なことであり、テレビゲームなど忘れて魚釣りに夢中になることも必要ではないでしょうか。

ところで、水と木の不思議な関係を考えてみたいと存じます。

かつて私は、鹿児島市の甲突川の災害現場で珍しい現象に出会いました。

甲突川には石造の眼鏡橋があり、名物となっておりましたが、災害で改修移設工事が行われることとなり、解体が進む中で意外な事実が明らかになりました。

百八十年前に造られた石橋の築造工法は、まず川底にびっしりと丸太を敷き詰めて基礎を造り、その上に石積みをして眼鏡橋が造られていることが判明いたしました。

その基礎となった丸太は、百八十年経っても水に浸かっている限り強度は十分で万々でありますが、不思議なことに水から取り出して空気に触れると短時間でぼろぼろになってしまうようであります。

木は水に浸かっている限り丈夫なものであり、古代遺蹟から一定の条件下で木製品が出土することからもうなずくことができます。

国土保全のため、森林の手入れ、特に間伐の必要性が叫ばれておりますが、丸太材を多量に利用した理想的な河川改修が本市内で施工され、歴史的な在来型の水制工法の見本ができましたことを喜び、魚の多い土岐川になることを願っております。